

平成18年度

中間評価論文要旨

- | | |
|--------|--|
| 宮崎 沙織 | カナダ・オンタリオ州の環境教育における
エコロジカル・リテラシーの育成 |
| 八木 雄一郎 | 国語及漢文科における「国文学史」設置の意味 |
| 佐藤 結美 | 女子の理科学習の促進に関する研究
—「介入プログラム」を中心にして— |
| 上原 千恵 | 青少年の危険行動と規範意識および
セルフエスティームとの関係 |

中間評価論文要旨

カナダ・オンタリオ州の環境教育における
エコロジカル・リテラシーの育成

宮崎 沙織*

1. 問題の所在及び研究の目的・方法

環境問題が顕現化して以降、数々の国際会議を重ねていく中で、環境教育に関する内容や方法について、様々な議論がなされてきた。

1990年代以降の環境教育研究では、環境倫理と環境保護や改善への参加技能の獲得を中心とした「環境のための教育」への注目が集まっている。とりわけ、環境倫理の教育への導入に関して言えば、北米を中心とした環境教育研究者たちは、生態学的概念の利用の重要性を論じている。その代表的論者であるオール (Orr, D. W) は、生態学的な概念を利用し、環境倫理を基盤とした環境教育の新たな目標として、「エコロジカル・リテラシー」を提唱した。エコロジカル・リテラシーとは、生態学の中心的概念である「相互関連」を重視し、様々な物事の相互関連について、常に予想し続けることを指す。オールの提唱以後、エコロジカル・リテラシーの定義は、実践研究とともに様々な環境教育研究者によって論じられた。そして、エコロジカル・リテラシーは、環境倫理を基盤とした生態学的な考え方を読み書きと同じように、様々な教科目で学ぶことを示唆しているのである。

先行研究では、オールの示すエコロジカル・リテラシー論に対して、道德教育的意義や文化学習の意義が評価される一方で、オールのエコロジカル・リテラシー論が曖昧であるとの批判やディープ・エコロジーなどの高次の環境倫理思想として取り違えて解釈されているものもある。また、エコロジカル・リテラシーを取り入れた環境教育実践は、環境倫理などの価値に関する理論を含むことから、教育行政機関では扱われにくい傾向にあった。事実、エコロジカル・リテラシー育成を目指した実践を行っている主体は、大学や民間組織などが多い。一方、教育行政機関によって行われている環境教育は、環境リテラシーを目標とする場合が多いのである。つまり、環境倫理を基盤とした環境教育の概念の導入は、理論

*筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻 (社会科教育学)

的にその重要性が論じられていても、実際に教育行政機関で行われる環境教育には、ほとんど反映されていない状況にある。

しかし、カナダでは、2002年に策定された環境教育の国家フレームワークの中に、エコロジカル・リテラシーを導入するという新たな動きが見られた。さらに、オンタリオ州のトロント市を中心とする地域では、トロント教育委員会が主体となって開発した、エコロジカル・リテラシーの育成を目指した環境教育プログラム（正式名称「オンタリオ・エコスクールプログラム」）が展開されている。このような、教育行政機関が主体となるエコロジカル・リテラシー育成プログラムは、管見の限り他には確認できない。しかし、教育行政機関が主体となったオンタリオ州のエコロジカル・リテラシーの育成を目標とした環境教育プログラムは、少なくとも5年以上継続しているのである。

つまり、カナダ・オンタリオ州の環境教育では、教育行政機関による環境倫理の概念を導入した環境教育実践が行なわれていると捉えられる。

そこで、本研究では、エコロジカル・リテラシーの育成について、カナダ・オンタリオ州の環境教育の成果により、その方略を明らかにすることを目的とする。

研究の目的を達成するため、研究方法として以下の手続きをとる。

まず、エコロジカル・リテラシーの代表的論者であるオールとカブラ（Capra, F.）のエコロジカル・リテラシー理論の検討から、エコロジカル・リテラシーの定義と構成要素を明らかにし、エコロジカル・リテラシーの理論的構造を提示する（第一章）。そして、導出した構造を、カナダ連邦の環境教育国家フレームワークの指針とオンタリオ州における環境教育の指針に即して検討する（第二章）。次に、実際に開発され、実践された教材・プログラム（オンタリオ・エコスクールプログラム）を事例に、エコロジカル・リテラシー育成の内容・方法を明らかにする（第三章第一節第二節）。最終的に、エコロジカル・リテラシー育成の実践から明らかにした内容・方法より、エコロジカル・リテラシー育成の環境教育プログラムの構成要素を析出し、エコロジカル・リテラシー育成の方略とみなす。そして、その方略の意義を考察する（第三章第三節）。

2. 論文の構成

序章 本研究の目的と方法

第一節 問題の所在と研究目的

- 第二節 先行研究の検討
- 第三節 研究方法と論文の構成
- 第一章 エコロジカル・リテラシーの理論
 - 第一節 エコロジカル・リテラシーの定義
 - 第二節 エコロジカル・リテラシーと環境リテラシーの関係
 - 第三節 エコロジカル・リテラシーの構造
- 第二章 カナダ・オンタリオ州におけるエコロジカル・リテラシーの位置づけ
 - 第一節 エコロジカル・リテラシー導入—カナダ連邦とオンタリオ州の展開—
 - 第二節 生命中心のグローバル教育におけるエコロジカル・リテラシーの意義
- 第三章 カナダ・オンタリオ州におけるエコロジカル・リテラシー育成論
 - 第一節 エコスクールプログラムにおけるエコロジカル・リテラシー
 - 第二節 エコロジカル・リテラシーの育成の内容編成
 - 第三節 エコロジカル・リテラシー育成の方略
- 終章 結語

3. 論文の概要

エコロジカル・リテラシーは、環境倫理想のもと、提起された環境教育の新たな指針であった。そして、エコロジカル・リテラシー論は、生態学的概念の理解を通じた、自然環境を含んだ地域社会における、個人の行動による環境問題の解決を図ることを目指した理論である。とりわけ、オールは、環境倫理想を重視した理論的検討を重視し、カブラは、生態学的基盤を明確にし、物事のつながりを強調した。エコロジカル・リテラシーの代表的論者である2人の理論の検討から、「様々な物事の相互関連とその相互関連の結果を、予想し続けること」というエコロジカル・リテラシーの定義と、様々な物事とのつながりを体系的に捉えるシステム思考と地域に対する愛着をもつことを目的とした場所の感覚の2点の構成要素が見出された。

カナダ国内におけるエコロジカル・リテラシーへの注目は、1990年代後半に始まる。それは、1998年のカナダに関係する環境教育者を中心として行われた協議会と、2002年の「環境と持続可能性のための学習のフレームワーク」の策定という形で表現されている。フレームワーク中では、国民に必要な能力として、エコロジカル・リテラシーという用語が採用された。さらに、オンタリオ州の環境教

育関係者が所属するオンタリオ州環境教育団体（EEON）の指針は、オンタリオ州がエコロジカル・リテラシーの育成を国家のフレームワークよりも重要視していることを明確にしていた。オンタリオ州がエコロジカル・リテラシーを重視する一因として、1993年から1996年に南オンタリオ地方で行われた Ontario Green School Project（「OGSP」と略記）があげられる。OGSPは、国家フレームワーク策定以前に、グローバル教育研究者のセルビー（Selby, D.）によって行われた実践で、生態学的概念を基盤としたコミュニティとの連携による参加型民主主義を強調する環境教育の実践理論を提供した。

OGSPを受けてカナダで始めて教育行政機関によって行われたエコロジカル・リテラシー育成プログラム（「エコスクールプログラム」と略記）は、1990年代のカナダおよびオンタリオ州の新たな環境教育の展開があって開発されたのである。エコスクールプログラムは、エコロジカル・リテラシーの育成を目標とし、詳細なガイドラインのもと実践が行われている。エコスクールプログラムの特徴は、学校と地域社会の連携、エコチームによる環境に配慮した学校づくり、環境に配慮した社会を作るための社会変革的な教科教育、そしてその3点を踏まえたプログラム開発という形で見出すことができた。

初等教育の場合は、社会変革のための行動とされる、環境マネジメント、消費者および経済活動、説得、政治的活動、法的活動のうち、環境マネジメントと消費者行動に関わる内容が強調されていた。低学年では、リサイクルやリユース、堆肥化など、環境マネジメントを中心に、環境マネジメントと生態系との関連した学習が展開された。そして、高学年になるにつれ、環境マネジメントに加え、消費者行動が導入されていた。特にこのプログラムでは、ただ行動についての内容を示すだけでなく、背景となる大量消費社会への批判を強調しているところに特徴がある。この大量消費社会への批判から行動へという流れは、まさしく環境倫理思想からの考えを基盤としているエコロジカル・リテラシーの特徴といえる。

エコロジカル・リテラシーの理論的検討をふまえた、カナダ・オンタリオ州のエコスクールプログラムの分析より、エコロジカル・リテラシー育成の方略として、次の4点が析出された。第一に、学習協同体としての学校を組織化することである。つまり、エコロジカル・リテラシーは、生徒である子どもだけが身につけるべき能力ではなく、すべての人が身につけるべき能力である。学校が地域社

会とともに、学習を行うための拠点となり、そのための組織づくりが重要となる。第二に、学際的なテーマのもとでカリキュラム開発を行うことである。エコロジカル・リテラシーは、各教科・領域に導入されるべき内容である。つまり、エコロジカル・リテラシー育成のためには、学際的なテーマをもったカリキュラム開発が不可欠となる。第三に、人間環境と自然環境の再生のための実践（行動）スキルの獲得をめざしたプロジェクト型学習と教科教育とを連携させることである。エコロジカル・リテラシーは、自分住む地域の学習と地域の問題の解決を重要とする。したがって、地域社会への参加を促すプロジェクト型学習と、その行動の意味を学習する教科教育との連携は、より実践スキルを獲得させることとなる。第四に、環境問題の背景となる社会への批判的学習を取り入れることである。エコロジカル・リテラシーは、環境倫理を基盤とするため、現代社会への批判的な視点を持ち合わせている。したがって、地域での実践のために、エコロジカル・リテラシー育成の方略では、社会に対する批判的視点を教育内容に、導入する。そして、ここで析出されたエコロジカル・リテラシー育成の方略は、学校教育改革としての意義をなし、自然環境を含めた地域社会と関わった学校教育が展開されることとなるのである。

4. 今後の研究課題

次の3点を今後の研究課題として示す。

第一に、エコロジカル・リテラシー育成の方略の思想的基盤を明確にするため、エコロジカル・リテラシーに関係する環境倫理思想の系譜を、体系的に明らかにする。第二に、エコロジカル・リテラシー育成の方略をより充実させるために、フィールドワークによる事例分析を行う。第三に、エコロジカル・リテラシー育成の方略から、効果的なエコロジカル・リテラシー育成モデルを構築するために、エコロジカル・リテラシーの理論的枠組みや、エコロジカル・リテラシー育成の方略を絶えず改善することである。

5. 主要参考文献

- Capra, F. (1999). *Ecoliteracy: The challenge for education in next century*. Liverpool Schumacher Lectures. CA: Center for Ecoliteracy.
- Environmental Education Ontario (EEO). (2003). *Greening the Way Ontario Learns: A Public*

- Strategic Plan for Environmental And Sustainability Education.* Ontario: Author.
- Environment Canada. (2002). *A report on the National Consultation on Environmental Learning and Sustainability.* Ontario: Author.
- Orr, D. W. (1992). *Ecological literacy: Education and the Transition to a Postmodern World.* NY: State University of New York Press.
- Toronto District School Board. (2004). *EcoSchools Curriculum: A Strategy For Developing Lessons For Ecological Literacy.* Ontario: Author.